

外国人の日本語およびメディア環境に関する調査

NHK放送文化研究所 最上勝也
浅井真慧
NHK国際局 戸村栄子
城西国際大学 石野博史

本稿は、新プロ「日本語」研究班1の調査研究の一環として、NHK放送文化研究所が中心となって平成6年度中に行った二つのメディア関連調査、すなわち・在留外国人*、・タイ国在住のタイ人、をそれぞれ対象にした日本語と日本のメディアに関するグループインタビューの報告である。

*日本に在留する、日本語を母語としない外国人を、ここでは「在留外国人」と総称する。

上記調査は、最終的には、日本の国内外で外国人が日本のメディアとどのように接触しているかの実態を探り、日本語学習とメディアとのかかわりを明らかにすることを目的とする。これらの調査の結果を、今後のメディアのあり方に生かしたいと志向するものである。とはいえ、メディア接触の実態を多少なりとも正確にとらえるためには、ある程度規模の大きい調査が必要である。今回のグループインタビューは、そのための基礎データの収集等を直接の目的として計画・実施したものである。

在留外国人へのグループインタビュー

在留外国人に対するインタビューは、NHK放送文化研究所の指導の下に、株式会社サーベイリサーチセンターが平成7年2月上旬、下記の5グループ34人を調査相手として実施した。なお、調査に際して、東洋大学社会学部助教授の喜多川豊宇氏の多大なご協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

南米(ブラジル人 6人)	2月3日	大泉市
欧米(ドイツ人 2人、 アイルランド人 3人)	2月4日	千代田区
韓国・北朝鮮(韓国人9人)	2月5日	江東区
中国・台湾(中国人7人)	2月12日	豊島区
東南アジア(フィリピン人7人)	2月15日	日野市

1. 調査相手のプロフィール

インタビューは日本語のみで行うことにした。そのため、調査相手は一定の日本語能力を持つ者に限られることとなった。その条件のもとで、国籍、性別、年齢、職業、在日期间などの点で、なるべく現在の在留外国人の実態を忠実に反映した調査相手の選択を行いたいと考えたが、実際には、種々の事由により、グループごとにかなり顕著な偏りを持つ選

択になった。次に各グループの特徴を、インタビューに先立って記入してもらった質問票によりまとめておくことにする。

ブラジル・グループ

男女3人ずつの計6人中、40代が4人(男2、女2)を占め、平均年齢は5グループ中最も高い。来日の理由として「仕事」をあげた人が5人と多く、また、幼児期に母国において家族や知人に、あるいは日本語学校で、日本語を習った経験を持つ人が多い。女性の1人は日本語会話教室を開いて仲間を指導しており、日本語の知識が特に豊富である。

ヨーロッパ・グループ

男4人、女1人の5人全員が20代で、在日期间が半年から1年とごく短い点が最も特徴的である。日本語はまだ十分読みこなせないが、それでも全員が漢字が書けると答えている。また母語以外の外国語(英語、フランス語、ドイツ語)のできる人が他グループと比べて多い。さらに親しい友人数が平均で約30人、親しい日本人数も20人となっており、これらの数字は5グループ中では図抜けたものである。

韓国グループ

男4人、女5人の9人中、20代が6人、30代が3人で、平均年齢は男女とも30歳に達しない。在期間は4年以上が4人いるが、半年未満も3人おり、ばらつきが大きい。ほぼ全員が来日後日本語学校で学んだ経験を持つ(3人は現在在学中)。ほぼ半数の人がパートタイムの仕事をし、ほぼ半数の人は漢字が書けない。このグループは友人数が際立って少ない点が特徴的である。平均で親しい友人7人弱、親しい日本人はたったの2人となっている。

中国グループ

男5人、女2人の7人の年齢は、男が30~40代、女が20~30代であるが、全員が大学卒業者でかつ在日期间5年以上と長く、そのぶん日本語が達者である。韓国グループと同様、ほぼ全員が来日後、日本語学校で学んでいる。親しい友人数は20人強で必ずしも少ないとは言えないが、親しい日本人数は約6人で全体の平均を下回る。

フィリピン・グループ

20~30代の女性だけのグループである。来日理由が仕事もしくは家族の事情(全員が日本人と結婚している)を中心とする点が他のグループと大きく

異なる。在日期間2～8年とバラツキが大きいとはいえず、5年以上が4人もいるわりには、日本語の読み書き能力は低い。親しい友人数は平均18人でまずまずであるが、親しい日本人となると3人程度で韓国グループ並みに少ない。

各グループ間に以上のような偏りが見られるが、以下の報告では却てこれを無視し、全体を一つのグループとして一括して扱う。ただし、発言を紹介する場合などは、発言者のグループ名をカッコ内に略記して示す。

2. 日本国内におけるメディアとの接触

A. テレビ

(1) 視聴量

「忙しくてあまり見る暇がない」(ブ)、「日本語が分からないので見ない」(ブ)、「勉強に役立たないのであまり見ない」(ヨ)のように、否定的な形で答えた人はごく少数で、時間の長短は人によって違っても、ほとんどの人がテレビに親しんでいる。ただし、各人の視聴時間について細かい質問はしなかった。

(2) 視聴内容

大別するとニュース、ワイドショー、ドラマ、お笑いなどの娯楽番組、子供番組(アニメを含む)、スペシャル番組、映画が主な視聴ジャンルである。ニュースはどのグループもよく見ているが、「22時は10チャンネル『ニュースステーション』、23時は12チャンネル『ワールドビジネスサテライト』を必ず見る。早く帰る時はNHKの19時のニュースを見る」(中)、「とりあえずニュースは全部見てしまう」(中)のように熱心なものから、「会社で正午のNHKニュースを見る。家では、夜たまにニュースを見る」(ブ)、「朝と夜とに少しニュースを見る」(フィ)という軽いものまで、程度はさまざまである。

ドラマ、子供番組をよく見る人は、フィリピンと韓国グループに多い。ワイドショーやお笑い番組を好んで見るのはフィリピン・グループの人であり、「NHKスペシャル」をすべて録画しているという人は中国グループの人である。

(3) 視聴目的

ニュースを見るのは情報を得るため、ドラマなどを見るのは楽しみのためであることは明らかであるが、中には「日本語の勉強のためによくドラマを見る」(中)、「正確な発音を身につけるためにはニュースがよい」(韓)など後述の日本語学習に関連した目的を持つ視聴もある。また、「子供が見るものを一緒に見ている」(フィ)といった育児と結びついた視聴形態も見られる。

(4) 衛星放送の視聴

日本国内で衛星テレビを見ていると答えた人は少ない。日本語がよく分からないので英語のニュースを衛星放送で見ているという人が2人(ブ、フィ)、夫がよく映画を見るという人が1人いた程度である。

(5) NHKのテレビ日本語講座*の視聴

「たまに見る」(韓)という人もいないわけではないが、「英語だから面白くない」(韓)、「ローマ字だから面白くない」(中)のように、アジアの人には概して不評である。

*NHK教育テレビで金曜の午後3時から30分間放送。

B. ラジオ

ラジオの聴取は日本語の能力に関係するところが大きい。「ラジオをよく聴く」と言うのは、日本語会話教室を開いているブラジルの日系二世の女性と中国グループの1人との2人だけである。また、理解能力はあっても、どうしても映像のあるテレビを見ることが多くなるという人(中)や、通勤途中に聴いていたことがあるという人(ブ)がいるのは、日本人の場合と変わらない。

異色の存在はアイルランド出身の大学生で、いつも寝る前に「ヤルキマンマン」*というギャグ番組を聴いている。ちょっと変わった日本語を覚えて友達を笑わせるのが楽しいという。

*「吉田照美のやる気マンマン」(文化放送で月曜～金曜の午後1時～4時放送)のことが?

C. 新聞・雑誌

新聞を読むか読まないか、読む場合、どの程度読むかもまた、日本語の能力(特に読みの能力)に深くかわる。日本語がかなり自由に読める人でないと、なかなか自分から進んで読もうとはしないのがむしろ普通であろう。逆に、読む力のある人にとっては、テレビと比べ新聞は「速報性は劣るが、保存性や分析にすぐれたメディア」(中)だし、それに事件などを詳しく知りたい時などは、大抵「新聞のほうが内容が多い」(中)から、読める人はなおのこと熱心に読む。その結果、接触する人とならない人の差が、新聞の場合はテレビ以上に大きく出ると考えられる。

もっとも、新聞を読まない理由として、「前は読んでいたが、むずかしいのでやめた」(フィ)のように率直にことばの問題をあげた人は少ない。「あまり読まない」「新聞はとっていない」など特に理由をあげないのがフィリピン・グループ、「漢字も難しいが記事の配列がよく分からない」「日本の新聞には外国の情報が少ない。米国中心でつまらない」といった理由のあげ方をするのがヨーロッパ・グループである。

なお、日本語の新聞は読まないが、英字新聞なら読んでいるという人が4人(ブ、ヨ、フィ)いる。その

一方で、以前は英字新聞を読んでいたが、今はやめてしまったという人も2人(フィ)いる。

新聞を読むという人も、そのレベルはさまざまである。おおまかに3段階に分けることができよう。

「『日本経済新聞』をほとんど毎日読む」(中、商社勤務の経験がある大学生)、「金融相場はどうしても気になるので翌日の新聞でよく見る」(中、貿易・出版業)、「福祉関係の記事が多いので『毎日新聞』をよく読む」(中、社会福祉専攻の大学生)を上級とすれば、「日本語の勉強のため『ひらがなタイムズ』を読む。情報が欲しい時は英語の雑誌を読む」(ヨ)、「『福島民友新聞』を読む。政治経済や興味のあるものは辞書を引ながら読む」(ヨ、福島在住)など多分に学習的要素の濃いものが中級、「たまに読む程度」「面白い写真が載っていると読む」「毎日読むが、ニュースではなくチラシやテレビ欄」(フィ)などが初級である。

雑誌では、『コスモポリタン』などの女性誌を、「たくさん絵があって楽しい」ので見ているという女性が1人(ヨ)いた。

D. 母国の情報の入手

日本のメディアに接触しているだけでは母国の情報が十分には得られない。その点をどうやって補うかをたずねた結果をメディア別に分けて記す。

(1) 放送

例えば短波放送で定期的な母国の情報を得ているといった回答はまったく得られなかった。日本の国内向け番組中の海外ニュースや海外取材ものが中心であるが、これだけでは、どの国の出身者にとっても、量的に到底満足できるものではないであろう。それでも中国関係の情報については「最近多くなってきた」「10チャンネルの『フロンティア』(土曜夜23時台)は香港のニュースが多く、とても興味がある」という声も聞かれる。しかし、全体としては、「少ない。『NHKスペシャル』(日曜夜9時)でたまにあるが、番組表を見ないと分からないのでほとんど見逃してしまう」(中)、「日本のテレビだけで不満だがしかたがない」(フィ)というのが、恐らくは平均的な意見であろう。なお、内容面に関しては「正確に伝えていると思うが、もっと深く追求したらいいと思う。例えば成功例だけでなく、失敗例も紹介するなど」(中、『NHKスペシャル』の「上海ドリーム」について)といった意見が聞かれた。

(2) 新聞・雑誌

印刷メディアによる母国情報の入手はかなり活発に行われている。「『日本経済新聞』にはほとんど毎日中国関係の記事がある」(中)など日本の国内メディアによるもののほか、「母国の新聞が3~4日遅れで郵送されてくる」(ブ、ヨ、中)、「学校にある新聞や雑誌を読む」(ヨ、韓、中)、「原宿にアイルラ

ンドの喫茶店があり、そこに新聞も雑誌もある」(ヨ)、「教会で新聞がもらえる」(フィ)のように、印刷メディアによる母国情報の入手は、その気になりさえすれば、放送よりよほど容易であるようだ。

(3) ビデオ

母国の放送をビデオテープに録画したものを日本に持ってきて見るということも割合よく行われているようである。「TVグロブ局の日曜夜の番組『ファンタスティック』のビデオテープが1週間遅れで来る。それを見れば1週間刻みで大体の動きが分かる」(フィ)、「歌番組などをビデオで見る。中国の本やビデオのレンタルが利用できる」(中)など。

(4) 家族との連絡

「大事なことは母が地方新聞に載っている記事を送ってくれる」(ヨ)、「家族に電話する」「手紙で母にきく」(フィ)など、母国の家族との電話や手紙による連絡で情報を得ている人も多い。ただし、これは当然個人的な情報が中心になるであろう。

E. 生活情報の入手

日本での生活で困った時はどうするかという質問に対する回答は、「自国の、または日本の友達にきく」(ヨ、韓) または「夫にきく」(フィ)、「新聞やテレビで情報を探す」(フィ)、「自国政府の学生対象のサービス機関がある」(ヨ)の3種の対応に分かれた。学生は学生なりの、主婦は主婦なりの対応をとるとのことのようである。

3. 海外における日本語メディアとの接触

調査相手の人たちが母国にいた時、あるいは一時帰国をした時などに、日本語のメディアとどれくらい接触しているか。これは接触できる条件が整っていて初めて可能になることであり、国や地域による差異が著しい。

A. 国際テレビ放送

NHKの衛星放送は韓国の一部でも見ることができる。また、ヨーロッパではドイツで有料(現在は一部無料)の日本語テレビ放送が見られる。そのため、国際テレビ放送についての発言は、これら2グループから限定されている。

韓国グループでは、在日期間が5年を超える人からは「ニュースをよく見る。向こうにいても日本のことが気になって、ニュースを見ないと気がすまない」「用があって韓国に帰った時に、衛星でニュースを見てしまう。地震や台風などが気になる」のような視聴に対する積極的な発言が聞かれた。一方、在日期間の短い人たちからは「見ても分からなかった」「日本語を全然知らなかったので、娯楽番組や相撲を見ていた」といった消極的な発言しか出なかった。結局のところは、「(日本語の分かる人には勉強になるが)大方の人には分からないと思う」とい

った総括になるであろう。

ヨーロッパ・グループでは、アイルランドの人から「日本語放送に触れる機会は全然なかった。映画だけ」、ドイツの人から「NHKが時々入ってくるが毎月 6,000 円は高すぎる」という、いずれにしても消極的な反応しか得られなかった。この4月以降無料で視聴できる時間が多少増えているので、今の時点で改めて質問すれば、いくぶん違った反応が期待できるかもしれない。

B. 国際短波放送

昔からある国際放送であるが、「総領事館に勤めていたので毎日聴いていた」という人を含めて、聴いていたというのはブラジル・グループの2人のみであった。

C. その他のメディア

そのほか、「上海のラジオで語学放送を聴いていた」(中)、「ラジオ番組に日本語の時間があつたが平仮名しか知らないの聴いても分からなかった」(韓)、「時代劇をビデオで見ていた。2週間遅れで見られる。紅白歌合戦は必ず見る」(ブ)、「上海の大手国营企業や研究所では『日本経済新聞』をとっている」(中)、などの発言があつた。

4. 日本語メディアの理解度

日本のテレビや新聞との接触と日本語能力(メディアの理解度)との間には、どのような関係があるのだろうか。関係のあることは明らかでも、それを数量的に表現することは差し当たって無理である。ここでも調査相手の回答をメディア別に整理することにより、大体の傾向を示すことしかできない。

A. メディア間の比較

テレビ、ラジオ、新聞を比較すると、アクションがあるのでテレビがいちばん理解しやすい、また、ラジオと新聞とは比較できない、という常識的な結論になる。ただし、これは一般論であり、人によって見解を異にするのは当然である。「新聞とテレビの難易は、関心のあるなしでずいぶん違ってくる」「どちらも抵抗がない」「新聞ニュースのほうがテレビニュースより見やすい。分からない時、すぐに辞書が引けるから」「話すことに障害がなくなった後では、新聞のほうが分かりやすい。テレビが全部分かるようになるには時間がかかる」といった声が中国グループの間で出ているが、日本語学習歴の長さに加えて、もともと漢字に対する抵抗感の少ないことが、あるいは、この人たちのメディア理解度を他のグループの人たちのそれとは一味違ったものにしていても考えられる。

B. テレビ

一口にテレビといっても、ニュース、ワイドショー、ドラマ、映画といった番組形態(内容)の違い

により理解度は大幅に違ってくる。一般に最も難しいと受け取られているのはニュースである。「98%分かる」(中)などというのはまったくの例外で、分かるという人でも普通は「大体分かる」「半分くらい分かる」(ブ、韓)と控えめである。一方、ニュースが分からないという人は、まず第一に「ことばが難しい」(フィ)点を理由にあげる。

ワイドショーについては「特別なテーマを詳しくやるので大体分かる」(ヨ)、ドラマと映画については「ストーリーが分かるので、ことばが分からなくても理解できる」(ブ)、「アクションでほとんど分かる」(フィ)のような感想が出ている。これらにあっては、ことば以外の要素により理解が促進されているのである。

番組のジャンルとは特に関係がないが、ここで特に触れておく必要のあるのは、画面文字(いわゆる字幕)の問題である。「阪神大震災のニュースを手話番組で見たが、字幕の文字でよく分かった」(ヨ)「手話番組は文字とフリガナがあるので西欧の人にも何となく分かる」(中)といった声は、字幕に隠れた効用のあることを物語っている。それだけに「字幕の速度はとても速い。漢字で詰まる」(ヨ)という初学者の声が今後はもっと考慮されてもよいのではないだろうか。

C. ラジオ

ラジオが「分かる」(ブ)という人は日本語そのものの理解力のすぐれた人である。中には「テレビよりラジオのほうが聴き取りやすい」(中)などという人もいるが、日本語能力が比較的低い人は、「速くて分からない」(ブ)、「聴くだけなので分かりにくい」(ブ)というのが普通の反応である。

D. 新聞

新聞もラジオと同様、日本語能力を見る指標として大いに有効である。多くの人が新聞を読むのには苦労しているようで、「読売新聞をとっているが、半分くらいしか分からない」(ブ)、「以前日本の新聞を講読していたが、日本の新聞を読むのは時間がかかる」(韓)といった声が聞かれる。しかし、中には「日本の新聞は難しいが、テレビでニュースを見るより新聞のほうが分かりやすい。テレビは聴いたら終わり、新聞は何回も読める」(フィ)という人もおり、問題は結局、新聞を読むのにどのくらい時間をかけることができるか、また、そうする意志があるか、ということに帰着するようである。

5. 日本語学習とメディア

在留外国人の日本語メディア理解能力は人によりさまざまであるが、理解能力の高い人と低い人との違いは、一つには日本語学習歴の違いから来るが、今一つにはメディアと取り組む姿勢の違いから来る

ているように思われる。仕事上の必要からか、趣味上の必要からかなどは問わず、メディアを積極的に利用して日本語学習の効果をあげようと努力することが、結局はメディアを理解する能力につながっているようである。

次に、調査相手の人たちの発言の中から、日本語学習から見たメディアの主な効用と考えられるものを拾い出し、箇条書きの形でまとめておこう。

覚えたことばが一つでもテレビで話された時にはそれが分かったという喜びからもっと学習しようという意欲が湧いてくる。(ブ)

テレビは皆よく見ている。彼らにとってテレビはすごい先生。(ブ)

テレビ(衛星放送)を見て、どれだけ理解できるかで自分の日本語能力がチェックできる。(韓)

テレビ(衛星放送)から、学校で習うのとは違った、生きた日本語を知ることができる。(韓)

テレビを日本人と一緒に見ながらおしゃべりしたり、分からないところを質問したりする。(ヨ)

(英語のできる人の場合)二か国語放送のニュースや映画などを録画し、まず英語で聴いて内容を理解してから日本語で聴き直す。(ブ)

日本語上達の秘訣は、日本語の新聞を読むこと。無理をしてでも読むこと。(中)

テレビを見ながら気がついたことをノートにとっておく。例えば阪神大震災の時、NHKは「オオジシン」で統一、民放は「オオジシン」と「ダイジシン」を混用していた。(中)

テレビを見ていて分からないことばに出たらメモをとって置いて後で辞書や電子辞書で調べか人に尋ねるかする。(フィ)

文化への関心が大事。文章の裏にある人の気持ちや心境が読み取れないと日本の文化はマスターできず、日本語も分かるようにならない。(中)

以上、在留外国人に対するインタビューで得られた結果には、調査相手の個人的な特徴と、グループ的な特徴とが複合して現れているように思われる。この点のより詳しい分析は今後の課題としたい。

タイ人へのグループインタビュー

タイでの調査は、平成7年3月上旬、NHK国際局の戸村栄子が主となって実施、同局の北泉マリとアパボン・パウサッチ(通訳)が協力した。インタビューは日本語で行ったが、一部に通訳が入っている。インタビューの日程は次のとおりである。

タウイタピセク中等学校(上級学習者男子8人) 3月9日
泰日技術振興協会日本語学校(上級学習者6人) 3月11日

タイ国立カセサート大学(上級学習者6人) 3月13日

1. 調査相手のプロフィール

タイでのインタビューは対象を年齢によって3グループに大別し、高校生、大学生、社会人の日本語学習者とした。次にそれぞれの特徴を簡潔に記す。

タウイタピセク中等学校(高校生)

1898年創立の文部省普通教育局普通中等学校(男子校) 現在総生徒数約3500名、中等部と高等部とに分かれる。今回の調査相手は高等部の外国語系日本語科の生徒8人(日本の高校3年生にあたり、過去2年日本語を学んでいる)で、これを2グループに分けてインタビューを行った。同校で日本語教育が始まったのは1987年、毎年20人程度が履修している。通訳の関与する場面がかなり多かった。

泰日技術振興協会日本語学校(社会人)

泰日技術振興協会は、技術の向上と開発の援助を目的として1973年に創立された社団法人。コンピューター・品質管理・工業計測などのセミナー開催、技術書・雑誌等の出版、産業技術情報の提供を主たる事業とする。その事業の一部にタイ人に日本語を教えるコースがいくつかあり、今回の調査相手はその中から任意に選ばれた男性3人(20代2人、50代1人)、女性3人(20代2人、30代1人)の6人である。仕事上の必要から日本語を学び始めた人が多く、日常的に日本語を使用している人もいる。半数が訪日の経験を持つ。インタビューは男女別々に行ったが、通訳の必要はそれほどなかった。

国立カセサート大学(大学生)

日本語科のできたのが1976年、86年に日本語専修の第一期生が卒業している。以来、93年までに延べ55人が日本語科を卒業。現在学生数は約100人である。今回の調査相手は、2年生~4年生の男1人、女5人。うち4人が2週間~1年間日本で過ごした経験を持つ。通訳はほとんど必要なかった。

2. 日本語学習の動機

日本語の学習を始めた動機は人により違うが、概略的に「仕事上の必要から」(社)、「将来役に立つと思うから」(高、大)、「日本のものに関心がある」(高、大)の3タイプに分けることができそうである。このうち最初の二つの動機については、自発的に始めた場合と、会社や周りの人に強制されて始めた場合とがある。三番目の動機については、具体例をあげておこう。「テレビゲームの翻訳がしたいから」(高)、「小学校のころから日本のいろいろなことに興味があり、日本人と日本語で話してみたいと思っていた」(大)、「日本の演歌が好きで、日本語がうまくなりたかった」(大)など。

3. 日本語メディアとの接触

である。

A. テレビ

高校生の場合、テレビを視聴する時間は1日に2～5時間と長い。勉強のために日本語の放送に接するということはない。社会人では、女性がケーブルテレビのIBCでNHKの日本語ニュースや英語ニュース(“Today's Japan”)を見ている。録画して勉強している人もいるが、ニュースの理解率はまだ40%ぐらいという。大学生も1日に2～4時間テレビを見ている。多くはドラマ、バラエティー、歌番組などが中心であるが、IBCでNHKのニュース7(バンコクでは午後5時放送)を聴いている者も3人ほどいる。ただし、速くてむずかしいと言い、“Today's Japan”で聴き直したり、最初から後者だけを聴いたりしているとのこと。

B. ラジオ

タイでは一般に日本よりはよほどラジオが聴かれているが、内容的には音楽などが中心で、日本語学習に結びつけて聴かれることはあまりないようである。ラジオではないが、社会人のうちの1人(女)は、通勤の途中、車を運転しながら日本語のテープを聴くという。

C. 新聞・雑誌

社会人のうち1人(女)が『日本経済新聞』を読んでいる。別の1人(女)が『ノンノ』を定期購読している。

D. マンガ・テレビゲーム

日本のマンガやアニメ、あるいはテレビゲームのソフトが、日本語のまま、または翻訳されてタイの子供や若者の間にたいへんな人気を博している。3人の子供(15歳、13歳、9歳)の母親である調査相手の言によれば、子供たちはマンガを辞書を引きながら日本語で読んでいる。また、長男はロボットが好きで「ホビー・ジャパン」を読み、下の子はテレビゲームを日本語で楽しんでいるという。既に述べたように、高校生の中にも、日本語で書かれたテレビゲームの攻略本を直接読みたいという理由から日本語コースを選択した者がいる。

E. 音楽

放送、ビデオ、音楽テープを通じて、日本で人気のある歌や歌手、タレントがタイでも人気者になっている。バンコクには、日本のヒットチャートを毎週紹介しているFM局もある。

以上述べたように、タイでは若者層を中心に日本の「娯楽メディア」が予想以上に浸透し、それに追隨して日本語が普及している感じさえする。ビジネス用日本語などは、あるいは、それとは別系統の流れと見るべきなのかもしれない。いずれにせよ、日本語の「ニュース・メディア」の浸透はまだ先の話